

令和 6 年 5 月 1 日現在

機関番号：32414

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K12926

研究課題名（和文）ムスヒ神・ムスビ神に関わる日本古代霊魂信仰の体系的な理解とその具体相の研究

研究課題名（英文）Systematic understanding of ancient Japanese spirit belief and research on its specific aspects about MUSUHI/MUSUBI

研究代表者

那波 陽香（森陽香）（NABA(MORI), YOKO）

目白大学・外国語学部・准教授

研究者番号：00845175

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、『古事記』『日本書紀』『萬葉集』といった上代諸文献をとおして、文学成立の基礎にあるとされる古代日本人が抱いていた「霊魂信仰」について、その体型的な理解と具体相とを明らかにすることを目指したものである。特に、古代信仰の中心に位置したムスヒ神・ムスビ神は「鎮魂」を司る神と考えられるため、霊魂信仰の諸相のなかでも「鎮魂」という側面に焦点を当て、主に『萬葉集』を資料として、歌と「鎮魂」との関わりについて考察した結果、「聞く」という普遍的な動作の意味、他界観、歌という文学そのものが保持している「鎮魂」の力、神観念の変遷などについて、明らかにすることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

『萬葉集』は1200年以上ものあいだ途絶えることなく読み継がれ、多くの研究も積み重ねられてきたが、特に霊魂信仰という側面に焦点をあてると、今なお解明しきれない課題が多く残されていることを明らかにした。また、そのうちのいくつかの問題点について、特定の歌を取り上げて論じたり『萬葉集』全体を見わたしたりと様々な研究方法を用いて具体的に論じた結果、日本文学そのものの意義について迫ってゆくための道筋を見出すことに近づいた。

研究成果の概要（英文）：This research examines the "belief in spirits" held by the ancient Japanese, which is said to be at the basis of the establishment of literature, through ancient texts such as the Kojiki, Nihon Shoki, and Man'yoshu. In particular, since the gods Musuhi and Musubi, who were at the center of ancient beliefs, are thought to be the gods that govern the "requiem of souls," we will focus on the "requiem" aspect of the various aspects of soul worship, and mainly examine the Man'yoshu. As a result of considering the relationship between songs and "requiem," we learned about the meaning of the universal action of "listening," views on the other world, the power of "requiem" held by the literature of song itself, and changes in the concept of God. I was able to clarify about this.

研究分野：上代文学

キーワード：上代文学 古事記 万葉集 風土記 日本書紀 霊魂信仰 他界観

### 1. 研究開始当初の背景

『古事記』『日本書紀』『万葉集』『風土記』『新撰姓氏録』などを総合すると、神話や神に由来する系譜などを創造することによって実生活の規範や根拠を神々に求めようとした点に古代的な心性の特徴を認めることができるが、そこで観想された多数の神々の中でも特に「ムスヒ神」「ムスビ神」と称される神々が、中心的な位置を担っていたと認められる。この神の名義については諸説あるが、すくなくとも古代のある時期からは、靈魂を結び込める「鎮魂」の神であると考えられていたことは確かだろう。

以上は、従来もさまざまな研究によって指摘されてきたことである。しかし、ではその肝心な「靈魂信仰」について古代の日本人が具体的にどのような観念を持っていたかという点については、なお未解決の課題が多く残されている。たとえば、

- ・少なくとも平安時代の鎮魂祭においては、『延喜式』などの資料によって、ムスビ神によって靈魂が結び付けられたのであるとすると、その結ばれる靈魂とは具体的にどのような働きをするものであるか。あるいは、「結ぶ」という形状にふさわしいものであるならばその靈魂とは具体的にどのような形状を想定したらよいのか。
- ・靈魂を結ぶ鎮魂の神としてのムスビ神の働きは、天皇だけでなく一般の人に対しても発動するものであるのかどうか。あるいは、一般の人たちも鎮魂を必要としたとするならば、それは何故であるか、また、どのようなときに必要とされたのか。
- ・鎮魂の具体的な方法は、「結ぶ」以外にどのような動作や手段があるのか。天皇と一般の人たちとの間で、違いはあるか。
- ・そもそも「神」「魂」「靈」とは互いにどのような関係性にあるのか。例えば折口信夫は、「たま」（いわゆる靈魂）の信仰を重視し、「たま」がある場合には「かみ」に昇華したり、「もの」になったりする、という可能性を論じたが、ムスビ神のように「たま」を扱うとみられる「かみ」の存在も確かめられるから、改めてそれぞれの関係性や違いを明確にする必要があるのではないか。

といった諸問題であり、これらについての検討は、少なくとも上代文学研究の見地からは、じゅうぶんにし尽くされたとは言えない状況であった。

### 2. 研究の目的

日本古代の神観念の中心的な位置にムスヒ神・ムスビ神があったことと、しかしそれにもかかわらずその神観念を支えているはずの靈魂信仰の具体相については今なお未解決の問題が多く残されていることは、先に述べたとおりである。従って本研究は、このような学術的背景に発し現状を打破することを意図して、「靈魂信仰の体系的な理解」と「その具体相」という二つの問いを設定し、文学研究を主軸に民俗学的方法も取り入れながら、その解明に向かうことを目的とした。

靈魂信仰は、文学や歴史記録の上に、例えば「人魂」や「鎮魂祭」などのキーワードが明確に記されていてそれが靈魂を主題に扱ったものであることがはっきりわかる事例もあるが、そうではなくそれぞれの文学や行事等が発生・伝承されてきた背景に信仰意識が伏流しているような場合も多い。そこでその両面に目を配りながら、最終的には、上代文学の発生と伝承とを支えている、古代日本人の心性の特質を明らかにしたい。

### 3. 研究の方法

近年の上代文学研究は、例えば『古事記』についていえば、「天皇の世界を根拠づける営み」（新編全集本）として成された書であると思ふ以上、『日本書紀』等の他文献とは「別個な物語」として読むべきである（神野志隆光『古事記とはなにか』）とする態度が、学界の主流であった。『万葉集』『風土記』等についても同様で、各文献を独立した一作品として作品全体を見通す論理を求めると同時に、作品内の個々の部分をその全体の論理の中に位置づけていくという方法が強く求められてきた。

しかしこの研究方法は研究者の研究対象を細分化してゆく方向へ働き、上述した神と靈魂とに関わる諸問題に向き合おうとするにあたっては十分な成果を挙げにくい。神や靈魂の問題を解明するには、必然的に諸文献を広く対照するとともに、先に述べたように、各文献が志向する論理だけでなくそこに伏流する本源的な心性を掴んで行くことが求められるためである。本研究にとって参照すべき靈魂信仰論に関する文学的立場からの研究成果が、昨今たいへん乏しいことも、学界が志向してきた学的態度に合致しにくい面を多く持っていることが一因と考えられる。

そこで本研究は、専門が細分化し互いに交わりを持つことが少なくなっている学界の趨勢に対して、それだけでは覆うことのできない論点に着目すべく、諸文献を横断的に扱う研究態度を持ち、文学だけでなく歴史学・民俗学・宗教学といった関連諸研究をも参照する。発表した論

文それぞれの具体的な方法と成果については次項に記すが、例えば『万葉集』の特定の歌を取り上げる論文であっても、注釈書など文学関係の先行研究に重きを置くのと同じ程度に、考古学や宗教学などの研究も重視し、その双方に丁寧に向き合うことによって、現在の上代文学界の水準に照らしても承認を得られるような、妥当かつ正統な研究方法を模索・提示する。

#### 4. 研究成果

まず研究期間中に発表した研究論文それぞれについて内容を記し、最後に全体を通しての研究成果を述べる。なお、論文はいずれも単著である。

##### (1) 「山部宿禰赤人が作歌二首あはせて短歌（『万葉集』九二三～九二七）考」

上代文学会の機関誌「上代文学」（査読あり）の125号（2020年11月発行）に掲載された論文である。本論は、『万葉集』の中でもよく知られている「み吉野の象山の際の木末にはここども騒く鳥の声かも」「ぬばたまの夜のふけゆけば久木生ふる清き川原に千鳥しば鳴く」の歌を含む、山部赤人の歌群を取り上げたものである。

この歌群は、有名であるだけに、従来多くの人々によって「研究」と「鑑賞」との両側面からさまざまなアプローチがなされてきたが、その両者は内容的に距離を持つ場合も多く、特に「研究」の立場からは、本歌を「鑑賞」する態度（すなわち、本来長歌と短歌とが一組の作品として『万葉集』に記録されているわけであるからその両方を同時に取り上げて鑑賞すべきであるのに、当該歌の多くの鑑賞文が長歌を切り捨て短歌のみを取り上げて秀歌として褒めたたえてきたこと）に対して、疑問のまなざしが向けられることもあった。そこで本論は、その「研究」「鑑賞」両方の立場に目を配りつつあらためて「研究」として取り組み、特に「見る」「聞く」といった鎮魂にかかわる基本的な動作が『万葉集』内の歌の歴史の中で表現上どのような変遷をたどっているかを論じ、結果として、この短歌を長歌から切り離し単独で鑑賞する歴史が、近現代ではなくすでに『万葉集』の内部で始まりつつあったことを明らかにした。

なお、いま述べた「見る」「聞く」という動作は、たいへんありふれたものである。しかし、折口信夫、土橋寛、池田彌三郎といった研究者たちによって、そのありふれた動作が日本人にとっては外在する靈魂を体内に取り込む「鎮魂」の作用を持つ場合がある（例えば「花見」など）ことが論じられてきた。本論は表立って「靈魂」に対する信仰の具体相を論じてはいないが、そうした先行研究を基礎に持ちながら「鳥の声を聞く」歌について研究したものであり、そのことによって、次に述べる芸能研究へつなげていく。

##### (2) 「万葉集と芸能（中）」「同（下）」

芸能学会の機関誌「年刊藝能」（査読あり）の27号（2021年）・28号（2022年）に掲載された論文である。この機関誌の字数制限の都合上、上・中・下の3回に分けて掲載となった。

先に（1）として挙げた山部赤人の万葉歌の研究をとおして、「見る」「聞く」といった動作の、歌の上における表現性と鎮魂との関わりを考える緒を得たわけだが、「見る」「聞く」といった動作、すなわち芸能的な動作が成立するということは、「見る側」「聞く側」に対して歌などを声に出したり何らかの演技をしたりする「演じる側（発信する側）」の存在もあり、その両者がそろふ必要があるということが、あらためて意識される。このことは、そもそも「歌」という文学そのものが発声して伝承・享受される形態を基本とするものであるから、無文字時代の伝承歌謡だけでなく『万葉集』に多くの歌々が記録された時点においてもなおやはり、「歌」自体に芸能的な側面が見出される可能性があるという予想に、当然たどり着く。そこで本論は、「『万葉集』と芸能」という大きな問題を設定して、『万葉集』が古代芸能とどのような、あるいはどの程度の関わりを持っているかを考察し、鎮魂というさらに大きな課題に向かっていくための足掛かりを築くことを試みたものである。

「万葉集と芸能（中）」では、『万葉集』全体を見わたして、例えば「琴を伴奏に歌った」とか「宴会で歌われた歌である」というような注記などを参考に、その芸能性の認められる程度に段階を設け、歌全体を整理することを試みた。宴席歌と明記されている歌は当然高い芸能性を持つ歌であると認められるが、そのほかにも、宴席歌であろうと諸注釈書によって指摘されてきた歌々も非常に多く存在すること、さらに言えば、「雑歌」の多くも何らかの形で聴衆の前で発声されたものであるとすれば「歌う側」と「聞く側」とが揃っているわけであるからそこにもある程度の芸能性を認め得る可能性があること、などを指摘した。これは言わば、

「万葉集と芸能」という課題に向かうための基礎作業と言えるものであるが、従来そのような視点から万葉歌を整理掲出し全体像を把握する試みはなされてこなかったため、将来の研究の礎となり得る作業であったと考える。

一方、続く「同（下）」では、『万葉集』所収の歌について、歌が「作られた時点」と「披露された時点」とに分けて考えた場合、「作られた時点」においてどのような芸能性を見出すことができるかを考察した。つまり、歌の芸能性を考えようとするならば、当然「披露された時点」に多くの目が向くことになるが、「作られた時点」において歌はどのような効果をもつものであったか、そしてそれは「芸能」の効用とどのように接点を持つか、という疑問であ

る。そこで本論では、『万葉集』の題詞や左注などから、歌が心の鬱結（わだかまり）を払うという機能を持つにいたった過程を明らかにした上で、それが「芸能」の本質に結びつくものであることをあらためて論じた。これは、歌や芸能というものが、人の心（すなわち靈魂）にどのように働きかけることができるのか、そしてそれを古代の日本人がどのように自覚していたのか、ということの問題にしている点で、大きな意味での「鎮魂」論の一環と位置付けられる。

### （3）「天なるや神楽良の小野」と「沖つ国」と

「国語と国文学」99-11（2022年、査読あり）に掲載の論であり、『万葉集』における靈魂觀念の具体的事例として、「人魂」を詠み込んだ巻16末尾の三首を取り上げた。当該歌は比較的良好に知られた歌であるものの、難解で従来あまり研究が進んでいなかった。そこで本論は、「おそろしき物の歌」という題を持つこの歌を取り上げることで、人間の靈魂の遊離を中心に、それがなぜ「おそろしい」という感情に結びついてゆくのか、あるいはまた日本人が伝統的に何を恐れてきたのか、そしてそれはなぜなのか、といった、日本人全体の心性の特徴という大きな課題に向かうことを目指し、歌の訓詁注釈といった基礎的な点から確認するとともに、文学のみならず民俗学の成果も取り入れて考察した結果、靈魂の移動、すなわち世界観について論じることになった。

具体的には、天と海と、二つの世界観についてそれぞれ取り上げた。天についてはこの地上と天上世界とがどのように信仰意識の上でかわりを持ち得たのか、という点を論じた。海の世界観については、上代文学作品に明確に記述された事例が少ないため、歌一首を通してではあるが、死後の行方としての海彼という考え方が上代にも成立していた可能性を、あらためて問い直した。本論を成したことによって、上代文学を支えている靈魂觀念が、生きている人間に対する鎮魂という問題だけでなく、死後の世界観の問題とも密接につながっていること、そして、世界観については今なお全体像を明らかにするには課題が多く残されていることが明確になった。

### （4）『萬葉集』における「神代（神の御代）」観

ところで、（1）～（3）として挙げた諸論は、いずれも「靈魂」に対して、直接的あるいは間接的に向かっていく論であったが、ムスヒ神・ムスビ神のように靈魂を扱う「神」の存在も当然論じるべきである。そこで、そもそも「神」とはいかなる存在として古代の人々の実生活の上で捉えられ、また「神」に対する觀念にはどのような変遷があったのかを知る必要があると判断し、『古事記』や『日本書紀』のような王権の神話に偏らない心性を知るために、本論において『万葉集』における「神代」観について論じ、「高岡市万葉歴史館紀要」34号（2024年）に発表した。

本論の内容は、まず「神」というものがどのような存在として古代の日本人にとってあったか、という、根本的な点について、万葉歌を精査した。ついで、そこで明らかになった古代日本人の神觀念を象徴する用語として「神代」という言葉を選び、その「神代」という言葉が、『万葉集』のなかで比較的最早い時期の歌においては常に人々の生活の規範として疑いなく機能していたのに対し、時代が下ってくるとその「神代」の持つ規範性の根拠を現代の物事の中から改めて確かめなおす態度が生じてきたことを突き止めた。それは言うてみれば、現代に対して作用する「神代」の規範力が、相対的に減じてきたということであろうと考えられる。「神代」は、『古事記』『日本書紀』では常に歴史の始原に位置し、特に『古事記』はその「神代」の中心を担うムスヒ神に大きな役割を担わせているが、『万葉集』を資料として研究しなおしてみると、朝廷の神話以外の部分では、その「神代」に対する意識が特に奈良時代以降急速に変化したことが明らかになった点に、本論の意義がある。

与えられた研究期間に論文として形になったものは、以上5本である。はじめに述べたように、本研究は、「靈魂信仰」について古代の日本人が具体的にどのような觀念を持っていたかという大きな課題に向かうことを目指したものであり、この問いに対して上述のとおり多様な角度を設定して「すなわち」、「見る」「聞く」といった靈魂信仰を背景にもつ行動とその伝承（上記1）、「歌を詠む」という文学活動そのものの持つ機能と靈魂信仰とのかわり（上記2）、文学の上にはっきりと用語として現れた靈魂信仰（人魂）（上記3）、神觀念の変遷（上記4）など、それぞれを5本の論文として発表したことになる。

「研究開始当初の背景」ではじめに述べたとおり、上代文献を総合すると、実生活の規範や根拠を神々に求めようとした点に古代的な心性の特徴が認められ、特にその要としてムスヒ・ムスビ神の信仰があった。「ムスビ」はすなわち外在魂を身に着ける「鎮魂」であるが、特にそれが「結び」として解釈されたとされる鎮魂祭などにおいては、具体的な行為も比較的想定しやすいが、それ以外に、「見る」「聞く」「歌を詠む」といったさまざまな行為と、神に対する考え方が、どのような経緯で靈魂信仰と結びつき、あるいはまた変遷していったか、古代における靈魂信仰の体系的理解につながる研究を多角的にすることができたと思う。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計5件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 森陽香	4. 巻 99-11
2. 論文標題 「天なるや神楽良の小野」と「沖つ国」と	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 34-49
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森陽香	4. 巻 28
2. 論文標題 万葉集と芸能（下）	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 年刊藝能	6. 最初と最後の頁 230-240
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森陽香	4. 巻 125
2. 論文標題 山部宿禰赤人が作る歌二首あはせて短歌（『万葉集』九二三～九二七）考	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 上代文学	6. 最初と最後の頁 61-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森陽香	4. 巻 27
2. 論文標題 万葉集と芸能（中）	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 年刊藝能	6. 最初と最後の頁 120-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 森陽香	4. 巻 34
2. 論文標題 『萬葉集』における「神代（神の御代）」観	5. 発行年 2024年
3. 雑誌名 高岡市万葉歴史館紀要	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 森陽香
2. 発表標題 『萬葉集』における「神代（神の御代）」観
3. 学会等名 上代文学会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関